

# 未知なるものへの関心

松 岡 克 尚

大学に入ってから、様々な未知なる世界の存在を知り、関心を抱くようになるという機会が多くなったのではないのでしょうか。もちろん入学以前から、そうした憧れを持ち、それを学びたいがゆえにこの大学の門をくぐった方もいらっしゃると思います。知らないことへの関心や憧れが、その人の進路や人生を決めるということは、考えてみればとても不思議なことかもしれませんね。

私ごとになりますが、「世界の国々」に関心を覚えたのは小学校1年生の時だったと思います。夏休みの宿題で世界地図を作製することになり、大小様々な、聞いたことのない名前の国や首都を書き込んでいくうちにワクワクしてきたことを覚えています。「世界って何て広く、多様なのか」と子供心なりに驚き、後は世界中の国名と首都名が言えるようになるというお決まりの道にまっしぐらでした。

私は聴覚障害を持っています。自分の住んでいる世界は「聴こえる」人の世界とはどうも違うのではないかということを認識しだしたのは幼少の頃からだと思いますが、どちらかというとな否定的な意味合いでした。違うからダメ、という捉え方だったように思います。しかし考えてみれば、同じ日本人であっても、性別や出身地だけではなく、障害の有無ということだけ見ても、実に多様です。そして障害といっても、その部位によって様々です。「障害者」と括られていても、障害の部位が違えば、その人の世界を私は想像すらできません。更に言えば、私は「良く聴こえる」人たちの世界さえも知らないのですね。そう考えると、それまで当たり前に接していた「聴こえる」家族や友人たちが住む「世界」が不思議に思えてきました。聴こえる人の生活感覚が自分のそれとは違うので、そこからトラブルが生じたりします。そのことに気づかされ、「多様であることは良いことだ。違うことを恥じることはない。でも多様過ぎて意思疎通に欠けて対立したり、バラバラにならないようにするためどんな仕組みが必要か」ということをテーマに研究するようになりました。

未知なるものとは、「世界の様々な国」といったものだけではなく、身近なところにも多くころがっています。遠くの世界への憧れを育むことも大事ですが、身近な所にある未知の世界にも目を向けてみてはいかがでしょうか。

(人間福祉学部教授)